

## より確かな社会認識を育てる社会科学習の展開

— 小学6年 「人々のくらしの誕生をさぐる ～室町文化～」 の実践から —

### 1 授業の構想

#### (1) 子どものとらえについて

子どもたちは6年生になり、歴史に興味を抱いて学習している。この時期の子どもたちが歴史に対しておもしろいと感じている思いをよりふくらませていくためには、子どもたちが単なる歴史の事実を知るだけにとどまらず、自分と関わらせて歴史の事実をとらえ、当時の人々の生き方にせまっていくことが大切である。そのためには、具体的には人の生きてきた姿や社会のしくみを理解し、人がどう生きてきたのか、これからどう生きていかなければならないのかを考えていくことが必要である。6年生の歴史学習においては、歴史上の人物や事実に出会い、今を生きる自分の生き方に関わらせながら、社会的な見方や考え方を深めていく子どもたちを大切に育てたいと願っている。

以下は、「聖武天皇がめざした国づくりをさぐる～聖徳太子とくらべて～」をめあてとし、外国文化の取り入れに焦点をあてた授業を展開した後の児童Aのふりかえりである。

聖徳太子と同じところは、やっぱり外国の文化を取り入れるところでした。でも、聖徳太子とくらべると、広がりや規模がちがうなと思いました。どちらも仏教の力を大切にしていたので、そこは同じだなと思いました。でも、遣唐使を16回おくれただけで、あれだけの文化を取り入れることができるから、すごいなと思います。だから、鑑真も大切にされたのだと思います。（児童A）

このふりかえりからは、聖武天皇が行った国づくりにおいて、聖徳太子の頃と外国文化を取り入れるという目的が同じでも、その規模や大きさが大きくなっているという違いに気づいていることがわかる。そして、遣唐使派遣の業績を感じながら、苦労して日本へ渡航した鑑真を当時の人々が敬ってくださったのではないかという思いをめぐらしている児童Aの姿が感じられる。そのような姿勢こそが、現在のくらしの中でも人を大切に敬いながらくらしをつくる姿勢を養うことにつながると考えると、児童Aのように当時の人々の思いや願いに共感しながら学習する姿勢を育てていくことは大切なことである。したがって、当時の人々の思いや願いを考察し、現在のくらしとの関わりを考えながら学習することを大切にしながら授業を構想していきたいと考える。

#### (2) 本単元の目標や内容と社会科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

##### ①本単元の目標や内容

本単元は、室町時代のながれをおおまかにつかみつつ、当時の人々が産業や経済、文化を発達させていくなかで、たくましく生きた当時の人々が建築物や絵画、庶民文芸などの文化をつくり出していったことをとらえるとともに、それが、今のわたしたちに伝えられ、くらしの中にいきづいているという見方・考え方を深めていくことをねらいとする。

本単元が扱う室町時代は、大きく分けると、南北朝の動乱期、足利氏による統治および守護の成長期、戦国大名の群雄割拠の時期という3つにわけられる。この時代、足利氏は、京都を舞台に南北朝の動乱をおさめつつ、幕府をたてて政治を行い、その権力をふるった。しかし、その権力は長続きせず、次第に地方を中心に守護大名が成長していき、それが、戦国大名の誕生につながっていく。このような時代の中で、人々は惣村を形成し、ときには一揆を起こすなどして、共同体を基盤とする社会をつくり出していく。そのなかで、農工商などの産業が発達したり、仏教、建築物、絵画、庶民による文芸などの文化が育ち、それが、今のわたしたちのくらしにつながっている。

当時の時代像を以上のように考えると、室町文化について理解するとき、当時の時代のながれを大きくつかみ、村や町を形成していく人々のたくましく生きる姿にふれながら、当時の人々の思いを考察し、興味をもって当時誕生した文化を調べていくことによって、室町文化の理解がすすみ、今のくらしにつながっていることにより気づくことができると考えられる。

②本単元における思考力・判断力・表現力の育成

平安文化・室町文化と今とのつながりを考察するとき、その追求を支えるために大切なものの1つに室町文化について調べたいという思いを子どもたちに強くもたせることがあげられる。この思いがなければ、室町文化について調べる意欲がわかず、今とのつながりの考察が弱いものになってしまう。

そこで、単元の導入として、金閣と銀閣に出会わせていく。金閣は足利義満が、銀閣は足利義政がたてたものであり、時の権力者である将軍がたてたという点では同じだが、その外観について、派手で荘厳な金閣に対し、質素な銀閣という大きな違いがある。この2つを比較し、当時の将軍の力に思いをはせることによって、室町時代全体のイメージをおおまかにつかむことができる。

金閣と銀閣を子どもたちに示し、その違いを見つけさせ、当時の将軍の権力に思いをはせることにより、時代のながれに気づきながら、そんな時代にどのような文化が生まれたのかという問題意識がもてるようにし、学習のめあてを設定していきたいと考える。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

①調べて獲得した自分の考えをわかりやすく伝えるために

平安文化・室町文化と今とのつながりを考察し、その見方・考え方をより深めていくためには、子どもたち一人ひとりが、まず自分の考えをしっかりとつとめることが大切である。したがって、そのための時間を単元展開計画の中に位置づけることとした(第4時)。それは、室町文化について直前の学習で調べているものの、平安文化については学習してから時間が経過しているため、今一度平安文化について思い起こし、内容を確認するためにも有効であると考えたからである。

そして、自分の考えをできるだけはっきりした形で表すことができるように、円グラフを使って端的に表すようにさせる。これにより、子どもたちは自分自身の考えの確認ができる。また、まわりの友だちや指導者がそれぞれの考えを容易に把握しながら討論を進めることもできる。



そして、この円グラフに表れた各自の考えを、指導者はあらかじめとらえて次時の話し合いを迎え、一人ひとりの見方・考え方を深めていくことにつなげていく。

②学級で学び合う時間を豊かなものにするために

子どもたち一人ひとりがもった考えを出し合い、より確かな社会認識の育成につなげていくためには、めあてに関する考えを出し合い、質疑応答をして、関連づけて考えたり、友だちの考えのよさを取り入れたりして、自分の考えを深めていくことが必要である。その話し合い活動を充実したものにするためには、教師が行う適切なはたらきかけが重要であるが、6年生という発達段階から、本単元では「掘りさげる」というはたらきかけを大切にしていきたい。

本単元では、文化が今のくらしにどういきづいているかについて、平安文化と室町文化を比較しながら考察するが、子どもたちは、各時代にさかんであった文化について比較的容易に調べていくと思われる。このような場合、文化そのものを人々がいかに使っているかだけを考えたり、それぞれの時代にさかんだ文化の数を比較して考えたりすることが予想され、これだけでは社会認識の深まりを期待するには十分ではない。そこで、今を生きる人々が、今のくらしにいきづいている文化に接し、どのような思いで文化に親しみ、楽しんでいるかについて「掘り下げる」ような問いかけをして、今とのつながりを深く考察できるようにしていきたいと考える。

2 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容(◇印は、学級全体の学び合いの場面)
1	金閣と銀閣がたてられた頃の時代の様子をさぐる	1	・金閣と銀閣の写真をもとに、たてられた頃の幕府の力や時代の様子について考える。
2	室町文化を調べよう	2	・当時の人々のくらしの様子について、絵の資料をもとにして読み取り、当時さかんだ文化について調べる。 ・当時さかんであった文化についてまとめる。
		3	
3	平安文化と室町文化 今とのつながりについて考察しよう	4	・平安時代、室町時代の文化の違いや共通点について整理しながら、今とのつながりを考察する。 ◇平安文化や室町文化と、今のわたしたちのくらしとのつながりについて話し合う。
		5	

3 授業の実際

(1) 学級全員の学び合いまでの様子 ～第1時から第4時まで～

①第1時

ここでは、金閣を足利義満が、銀閣を足利義政がたてたことを知るとともに、金閣と銀閣を比較して気づくことを発表し、その時代像を想像していった。子どもたちは、「どちらにも池や庭がある。」など、ときの権力者の力を感じていた。しかし、金閣については、「派手で光りすぎるぐらいだ。」「あまりにも目立つので、襲われてしまうのではないか。」といった印象をもつ反面、銀閣については、「狭いけど落ち着いた感じがする。」といった発言があった。なかには、「住むなら、金閣はすぐに飽きてしまいそうだから、銀閣のほうがいい。」といった発言もあり、後の文化学習にもつなげていける発言があった。その後、「どんな文化が生まれるだろうか」となげかけたが、「金閣が派手だから、平安時代みたいに華やかな文化ではないか。」「義政の頃は、将軍の力が弱くなっているのだから、戦いが激しくなって、戦いに関わる文化が育っていったのではないか。」といった予想が出された。

これらの予想をもったことは、実際に室町文化の内容を調べるにあたって、確かめるという目的をもたせたり、調べたいという思いを強くもたせたりするためには有効であり、第2・3時の学習を意欲的に進めることにつながっていった。

②第2・3時

第2時では、まず、当時の農耕に関する絵資料をもとに、くらしの様子をさぐっていった。ここでは、「牛や馬を使った。」「女の人も活躍している。」「笛や踊りをしながら、応援しているようだ。」などの意見が出され、工夫し、協力して農耕に従事している様子をつかんでいった。このように、当時生きた人々のくらしのエネルギーを感じさせた後、「どのような文化がさかんだのか」をめあてにして、個々で調べ学習を行った。

第3時には、各自が見つけた室町文化について出し合った。その結果、子どもたちからは次のようなものが出された。

- ・能、狂言 ・生け花 ・茶の湯 ・水墨画 ・猿楽 ・綱引き ・祭り
- ・建築・書院造 ・庭・枯山水 ・御伽草子

これらの文化が出される時、その内容を確認していると、「あっ、それは家にあるよ。」とか、「それなら家の人がやっているよ。」などの声があがった。例えば、「茶の湯は、おばあさんの家でやったことがある。」「けんさんなら家にある。お母さんがやっている。」「庭の枯山水は、家にも似たようなところがあって、とても落ち着く。」などである。これらの発言は、この後に学習する予定である、今とのつながりの考察に関連したものであり、今を生きる子どもたちがどの程度室町文化にふれているのかを指導者がある程度とらえることのできる時間にもなった。

③第4時

第4時では、前時に明らかにした室町文化について、今とのつながりを考察する発言が多く見られたことを受けて、指導者から「平安文化と室町文化 どちらが今とのつながりが大きいか考えよう」というめあてを提示していった。子どもたちは、各自で平安文化について思い出しながらあらためて調べるとともに、平安文化と室町文化について今とのつながりを考察した。その結果、第4時終了時では、今とのつながりの大きさについて、以下のようにまとめていた。

平安・室町文化と今とのつながり		人数
平安文化の方が室町文化よりもつながりが大きい	どちらの文化も同じ	4名
室町文化の方が平安文化よりもつながりが大きい		7名
		13名

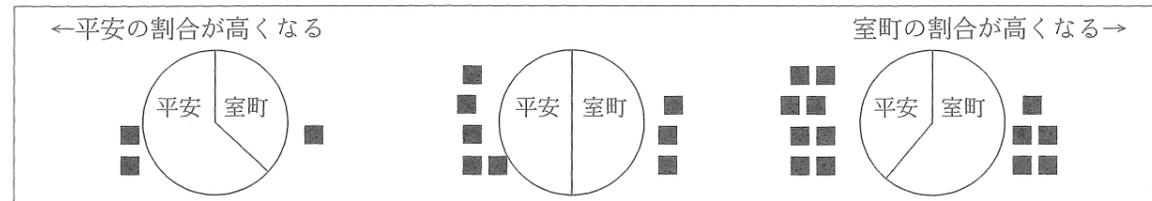
つながりの大きさについては、本人、あるいは友だちや指導者に各自の考えを見えやすくするために、円グラフを使って表すことにした。ここでわかることは、どちらの文化も同じと考えている7名以外は、

つながりの大きさについて個人差があるということである。室町文化の方がつながりが強いと考えている13名のなかでも、「45%対55%」と考えている子もいれば、「10%対90%」のように考えている子もいた。この個人差は当然のことであり、この差をつくっているこだわりこそが、考えを作り出している理由の主張につながっていくはずである。そこで、その差を生み出している理由に注目して、各自の考えをとらえながら、今とのつながりをみんなで考察していく時間をむかえることにした。

(2) 学級全員の学び合いの様子 ～第5時～

第5時では、まず「平安文化と室町文化 どちらが今とのつながりが大きいかな話し合おう」というめあてについての自分の考えを黒板に表していった。ネームプレートを黒板に貼ることによって、本人、そして友だちや指導者が、各自の考えを明確に知った上で話し合いをするためである。その結果は、次のとおりである。

※■は、各自のネームプレートを表す



次に、自分の考えのもとになっている理由について明確にしてから話し合いをしていくために、各自で理由について再考する時間をとった。このとき、指導者は、まず前時から考えを変えた児童Bのもとにいき、どうして変わったのかを尋ねながら、児童Bの理由が明確になるようにしていった。児童Bは、前時終了直後では平安文化の方がつながりが大きいと考えていたが、どちらも同じという意見に変わっていた。意見を変えた理由は、平安時代にかな文字が生まれたことは大きいですが、室町文化が今のくらしに伝えている落ち着きのある雰囲気についてあらためて考え直していたからだった。児童Bがそう考え直したことを認めながら、他の子どもへのはたらきかけも行っていった。

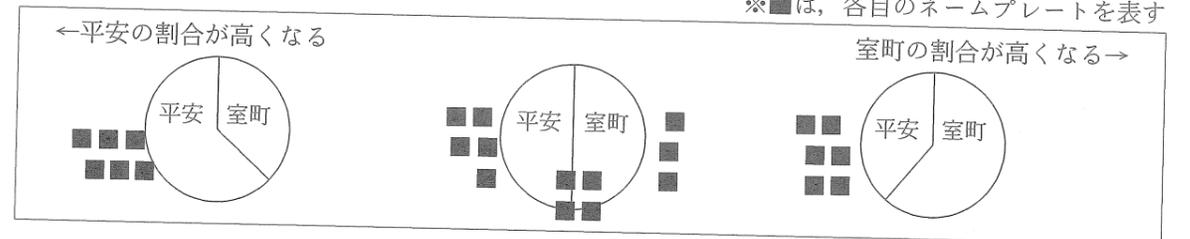
そして、「平安文化と室町文化 どちらが今とのつながりが大きいかな話し合おう」のめあてに沿って話し合いを始めた。以下は、その場面の授業記録である。

- T 1 では、自分の考えをこれだと判断した理由を聞いてみたいと思います。まず、人数が少ない平安文化の方がつながりが強いと言っている人からどうぞ。
- 児童C 平安はカタカナとひらがなが生まれたけど、室町には御伽草子があって、それはひらがななどを使って書かれているから。
- 児童D それに、かな文字の方がやっぱり身近に使っているから。
- 児童E 室町は生け花や茶の湯、平安は花見があるけど、花見はどの時代の人もやっているよ。だから、平安だと思うけど、建物でみると、室町は金閣や銀閣があって、平安はお寺などがあるから、どっちもどっちとも考えられる。
- T 2 考えが揺れているところもあるみたいだね。どちらも同じと考えている人はどう？
- 児童F ぼくは、平安にはすごろくや貝あわせがあり、室町には生け花や茶の湯があって、どちらも今の時代に生かされていると思う。
- 児童G ぼくは、やっぱりちょっとだけ平安が大きいと思う。でも、室町もたくさん今につながる文化がある。でも、やっぱり平安で印象に残るのは身近に使っているかな文字かな。
- T 3 ほかに、同じだという人は？いないなら、室町の方が大きいという人、どうぞ。
- 児童H 平安は、印象に残るのがかな文字と花見ぐらいだけど、室町には生け花や茶の湯、能、狂言などたくさんの文化が今に残っている。
- 児童I 室町には御伽草子があって、これはとっても有名で、ほとんどの人が知っているよ。
- 児童J それに、平安の十二単や大和絵はあまり伝わっていないけど、室町の文化はほとんどの文化が今に伝わっている。
- 児童K ぼくは、建物に注目したんだけど、平安ははなやかで、室町の金閣も派手だけど、銀閣などはとても落ち着くから、今に近いと思う。
- 児童L それに、枯山水の庭もあって、やっぱり室町は和風で、とても落ち着く。
- T 4 和風だとなつながりが…
- 児童M (全員) ある。
- 児童N 平安は遣唐使があったけど、この時代では廃止されているので、日本の文化が始まっている。だから、日本の文化が始まったという点では、室町の方が大きい。
- 児童O 室町の能や狂言は、インターネットで調べたら今のオペラやミュージカルに近い。それそのものでなくても、今に残っているものに影響を与えているというのも理由になる。
- 児童P ちょっと反対意見で、一寸法師やうらしまた郎はほとんどみんなが知っていると言っていたけど、かな文字だってみんなが知っていて、普段から使っているよ。
- T 5 なるほど…。人に注目しているね。使っている人という面から考えると、どちらがつながりが大きいと言えるんだろうね。例えば、茶の湯はどんな人がやっていた？
- 児童Q おばあちゃん。お母さんや妹。

- 児童R そう考えると、御伽草子などは、小さい頃から読み聞かせをしてもらっていて、今とのつながりはとても大きいよ。
- 児童S だけど、能や狂言は子どもがほとんど見ない。
- 児童T おばあちゃんが見ているのをいっしょにみたけど、つまらなかった。
- T 6 おばあちゃん？
- 児童U 集中して見ていた。
- 児童V 生け花は男の人はあまりやらないけど、茶の湯はお年寄りがよくやる。
- 児童W でも、平安のすごろくはだれもが楽しめるよ。
- T 7 それぞれの文化の数、内容、だれが親しんでいるかなどの面から意見を交換したんだけど、最終的に自分はこう考えるよという意見をまとめてみましょう。考えが変わったという人は黒板のネームプレートを動かして貼りなおしてみてください。

ネームプレートを貼りなおしてもよいという指示を出したところ、ほとんどの子どもがネームプレートを動かして始めた。その貼りなおし方には、それぞれの考えがよく表れており、プレートの位置は大きく変わらないが、理由について考えた結果、「どちらの方が」という割合に変化があったことを表現するためにネームプレートを少しずらして貼りなおしていた。黒板では、大きく言うと考えを3つにわけられているが、考えた結果として微妙な思いを各自が黒板に表現していたと考えられる。

※■は、各自のネームプレートを表す



例えば、話し合い活動を行う前と比べてみると、室町文化の割合を大きくしていた子が減り、全体的に、平安文化の割合を少しずつ大きくしている様子が見られる。また、今とのつながりは、平安文化と室町文化のどちらにもあるという考えが増えていることがわかる。

このような考えの変化について、各自の学習の足跡をふりかえってみると、考えの変化がわかるが、ここでは、紙面の都合上すべては掲載できないので、抽出して掲載することとする。

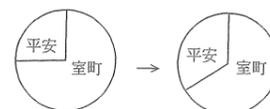
〈児童A〉 [考え]



[理由]

平安時代の今にも続いている主な文化は、かな文字だけだけど、室町文化には書院造、茶の湯など、たくさんある。でも、今日の授業でかな文字はやっぱりすごいものだなと思う。だから、どちらとは言えない。

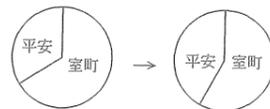
〈児童B〉 [考え]



[理由]

平安は、かな文字や花見など、みんなが楽しめる文化が出ている。でも、室町文化は今に伝わる文化の数が多く、その和風の文化が子どもにまでちゃんと伝わっているところがいいと思います。

〈児童C〉 [考え]



[理由]

平安文化は、かな文字や遊びなど、だれでもしているので今へのつながりが前より大きく感じられました。でも、室町文化も今につながる大きなことが多いので、同じくらいだと思います。

3人の考えの変化をみてみると、室町文化の方が今とのつながりが強いと考えていたことに、変化が生まれていることがわかる。単に、室町文化と今とのつながりを考察しただけでは、このような考えの変化は生まれてこないだろう。やはり、平安文化と室町文化を比較しながら、今とのつながりを考察したことが、考えの深まりをもたらしたのではないかと考える。児童Aが結論づけているように、どちらとも言えないという見方・考え方は、どちらの文化とも大切なものであるという考えでもあり、単独で学習したときよりも、各時代の文化のよさをより深く感じていることがわかる。

また、平安文化・室町文化と今とのつながりについて、文化の数や内容だけから理由を考えるのでは

なく、人々がその文化にどのように親しんでいるかを問いかけていったことが考えに深まりをもたらしたのではないかと考えられる。その結果、児童Bや児童Cの記述に、「みんなが」「子どもにまで」「だれでもしている」とあるように、人々の親しみという面からの考察が加わったのではないかと考える。

## 4 成果と課題

### (1) 成果

#### ①調べて獲得した自分の考えをわかりやすく伝えるために

今回の実践では、平安文化と室町文化を比べて、今とのつながりを考察した。子どもたちが、どちらの方がつながりが強いかにについて考えをもった時、その理由をまわりのみんなにうまく表現していくことが、社会認識の育成をめざす話し合い活動を活発なものにすると考え、円グラフにその考えを表現させた。「□□文化の方がつながりが強い」だけで集約すると、一人ひとりが考える理由の強さを把握することは難しいが、円グラフを用いることによって、考えの強さが割合になって目に見える形で表現されるため、子どもたちは自分の考えがどこに位置づけできるかを明確に把握しながら学ぶことができた。また、教師は、話し合いを進めながら発言者を指名する時、各自の考えの強さを把握しながら指名できるので、「つながりがかなり強い」や「ちょっとだけ強い」といった思いの違いを大切に扱いながら進めることができた。

#### ②学び合いの時間における「掘り下げる」というのはたらきかけの有効性

社会認識の育成をめざす時、学び合いの時間において「掘り下げる」というのはたらきかけを適切に行うことの大切さが今回の実践でも明らかになった。授業では、文化の数だけで考えてしまったり、かな文字のように一つ大きな文化が出てくると、それだけで考えを固定してしまうような姿もみられた。しかし、文化に親しむ人々の思いについて言及していく「掘り下げ」を行うことで、別の角度からの考察を促し、子どもの考えが豊かなものになっていった。

### (2) 課題

#### ①有意義な話し合い活動をつくりだすために

思考力・判断力・表現力を一体のものとして育成していくためには、学級全員の話し合い活動が有効であることは、今回の実践からも明らかである。しかし、45分という限られた授業時間では、論点を絞った話し合い活動をつくっていく必要がある。今回は、文化の数や内容を認めながら、文化と人々の親しみという角度からの掘り下げを行ったが、時間がもう少しあれば、より深めることができたと思われる。やはり、大きな広いめあてで学習するときほど、タイミングよく話し合い活動の論点を絞るなどして、豊かな学び合いを実現していく必要がある。

また、文化と人々の親しみという角度からの掘り下げ以外に、有効な教師のはたらきかけはなかったのかを考える必要がある。そのためには、実際に文化のよさを味わっている人の話を聞く等の方法が考えられるが、いずれにしても実践を通して確認していかなければならない。

#### ②問題意識を強くもった学習のめあてを設定する

平安文化・室町文化と今とのつながりを考察するための追求を、より意欲的に行わせるためには、金閣と銀閣から室町時代に出会わせていく方法もあるが、ほかには雪舟の墨絵など落ち着いた文化作品に直接出会わせたり、茶の湯体験などから導入していく方法もある。また、学習のめあてと調べ学習の関連から考えると、今回のめあてを最初に示した上で、平安文化や室町文化について調べるという単元展開も考えられる。ここに記述した点については、今後の実践で確かめていきたいと考える。

以上、平安文化と室町文化を比較した学習の様子を紹介した。学習指導要領改訂をうけて、小学6年社会にとって文化学習は新しい工夫を取り入れることが望まれるが、今回の取り組みはまだまだ十分なものではない。江戸文化の学習との関連も意識して、本単元を構想するとよりよい実践も期待できると考えている。今後の文化学習のあり方をさらに探していきたいと考える。 (文責 陶山 昇)